

馬尾故鄉全集

しまねとじゆぜんしゆだいのかん
島尾敏雄全集 第4巻

一九八〇年九月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六一七九九

堀内印刷・美行製本

© 1980 Toshio Shimao

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島
尾
敏
雄
全
集

第4卷

兆	5
朝影	37
亀甲の裂け目	56
大鋏	70
月暈	80
未明	91
死人の訪れ	110
断崖館	124
*	
賈学生	145

ブックデザイン

平野甲賀

兆

道路は乾燥し切り、砂ぼこりが厚い層になって道の上に浮き、靴に吸いついた。

空の高い所では、風がうなり声をたて、あわれな金切声のように長く緒をひくのだが、たけり狂うそのエネルギーの正体をつかむことはむずかしいし、そのひょうひょうという吼え声をきくと妙に意気が沮喪した。

地上にも風は吹きまくっていた。然し地上を吹く風は大空の風のうなりのように吹きっ放しではなかった。でたらめの方向から、でたらめの間を置いて吹いて来た。そして風が吹くと厚い層の砂ぼこりはもうもうと吹き上った。耳も目も口も襟も胃もさらさらになった。そのさらさらの砂ぼこりの道を人の流れがひきもきらずに続いていった。

巳一はその中に毛内キウナイと沢ササと一緒に肩を並べてまざっていた。

三人はともかくかつての学生仲間の関係にあったが、そういう間柄にみられるいかにも親しそうな擬態は巳一をたまらなくした。然し毛内も沢もその擬態を重荷に思わずに十二分に利用し人にもおっ

かぶせることが度々であったので、巳一はその二人を心の底で軽蔑していたかも知れないのだ。といっても三人顔を合わせれば巳一は彼等とぞんざいな会話をした。二人とも世間ではうまくやっていたのでその中に具合よくとけ込んでおり、巳一の鳥肌立ったような世間恐怖症に比べると、どうしても腰の辺りがしっかりしている。巳一にしても毛内や沢なみに調子よく世間となれあいたいと思うが、二人とじかに顔を合わせると、とたんにうまくやり度くなくなり、二人の顔付きが馬鹿げて見え、ついでに自分の脂肪の少ないかさかした容貌がうとましくなつて来る。毛内と沢の二人で会話が仲良くはずみ出すと、巳一にはそれが隠語めいて聞こえ反射的に無口になつて行く。

さらさらの砂ぼこりをかぶり白い道を歩いていると、隠語に似たそれらの言葉は二人の共謀の兇器となつて巳一の横顔にじつと押しつけて来るような妄想が起り、冴えない蒙古型の薄い眼が四つ巳一の意識にはりつく。その眼は無意識な眼だ。単に目標に向いて動かないというだけだが、巳一はそれになじたじとなつた。その眼には羞らいがなくなつただ四つ並んでいるというだけで、巳一がその中に毛内も沢も自分を軽蔑していると読みとつたのは思い過ぎだ。然しそれだから一層冷酷な感じはあつた。

毛内と沢が世間を背にしてがっちり立っている固さに向つては、こっちはふにやふにやだと二人に印象付けているのではないかと巳一は思うのだが、これは二人に対する巳一の負い目だ。

そうはいうものの、三人こうして一緒に集まってみると、毛内と沢の結びつきが必ずしもうまくがっちり損益収支相償えているとも思えない。巳一がその気にさえなれば、二人のどちらかか組み二人の結合に水をさすことも出来そうだ。然し二人のそばによつてみると、ちんちくりんのくせに精力的

な浅黒い顔の毛内や、沢の小太りで髭のそりあとの青い女好きのするたのもし気な顔ばかりがむんむんしていて彼と二人のそれぞれの間に深いさげ目が立つのを感じる。

人々は相変らず歩いている。

そのうちに、その道を歩いている者は、一様に方向が同じであるらしいことが分つて来た。向つて行くその方にきつと何かきまりきつた動きのとれないことが待ち構えているかも知らないという不安も含んでいた。流れのしもの方に危険な瀑布がかかっているような気配に気がまいるのと同じだ。然し瀑布がしかとあるか無いかは分つていない。ただ流れ行くままに滝の瀬音でも聞えやしまいかと、きき耳を立てているに似ていた。

相も変らぬ天空の吼える声と地上の突風のまき立てる砂塵が、人々にぐちっほい調子をくつつけた。それなのに太陽はおだやかに照りつけていた。風が強いのに光がおだやかだというのは少しちぐはぐな感じだが、事実太陽は音と風と埃を通して地上をじりじりとおだやかに照りつけていたのだ。身体は汗ばみ、汗ばんだ身体に砂ぼこりがまといついた。

すると風が人々の声を運んで来た。

〈我々は外国人に訓練して貰うために集合しつつあるのだ〉

又もや砂ぼこりが舞い上った。

緒をひいた風のすすり泣きが天空にあった。

たった今決心しなければならぬのだと已一は思った。然し彼の心には躊躇があり微妙にゆれたのだ。これはどういふことだ。

巳一は毛内と沢の顔付きが気になった。どうせおんなじだろうと思っても、ひとりひとりの心をのぞいて手でしかとつかむことは出来ない。

動員！ という誘惑的なざわめきが地上を覆い始め、風はそれを吹き払ってはいるのだが、人々の心の中に植えつけられたさまざまな偏見をこそぎ落すことはむずかしい。それは人々の心の中にさまざまなに屈折して行く。三人共に軍隊生活と戦場での体験があったことは、陣頭で風に吹きなびく自分の絵姿が幻影となつて立ちがちであり、とどのつまりそこに陥ち込んでも絵姿の自分が再び立ち上つて来るのだという錯覚があった。肉体の爽快さが、向うにあると無理にも思い込むことは気やすめになつた。然し現実には断ちきれはしないから、絵姿は生ぐさい体臭のからみ合うあのむっとした軍隊生活の残飯捨場にとつて代られ、そこにはこのちんちくりんの顔とかかっぶくのいい顔のようなものしか並びはしないし別のものがあるのではない。

巳一は毛内にも沢にもその表情の中にどんな反応も認めることが出来なかつた。彼はそれで少し安心した。こずるい笑いの皺が口辺にただよつた。同じ穴の貉の臭さを感じられた。三人共にむかしから鋭さはなく、三人集まってみると生ぬるさがかきり露呈した。貉どうし首をよせ合っていることを感ずるのは気分が悪い。それで巳一は二人を一層軽蔑した。それならどうすればいいことなのか。然し既に散開の号令がかかっていた。どこからともなく、その号令を風が砂塵を吹き上げ吹き上げ運んで来た。人々はその場に散って土の上に腹這いになつた。

毛内も沢もにわかに敏捷になつた。巳一も腹這う姿勢をとつた。もう訓練は始まっているかも知れないと思つた。

何が起るか分らないが、みんながやる通りにしていれば、やがて分つて来るんだというあの体験からの智慧があった。身を伏せてみんなと一緒にいると少なくとも安心感もてたし、みんなのやり方に逆らおうとするとひどく疲れた。

一人ではなく三人一緒に行動しているのだと思うことは楽だ。然し二人が現状の中で努力して抜けて先ず先頭切つて将校になつて行くのに違ひのないことは今迄のつき合いから押しはかることが出来る。学生の時の試験にも二人はそうであった。試験勉強なんぞおよそくだらん制度だねなどと、小つぶで精悍な毛内が先ずそう言うと、体格のいい沢がびくりとして、そうも言えるけどそんなことを言つていてこつそり人の倍も勉強するんだからなあ君は、などと云つたものだ。そこで二人は声を合せてアハアハと笑つたものだ。試験の当日には、すっかり準備の出来た二人が、直前になつてあわてている仲間を三角の眼で見ているかと思うと又開始時刻ぎりぎりまで執拗に情報蒐集に廻つて歩かしていたものだ。二人は当面の問題に喰い下るだろう。二人がやがて将校の座につくことは明白である。今のつらさは二人にとっては将来の栄光の保証のようなものだ。

巳一はあいまいな顔付きになつている自分を意識した。彼は非難をこめた二人の目付きを知っている。非難というと当を得ないかも知れない。はつきり非難であればむしろよかつたのだが、それはかかるかいの色あいだ。お前いつでも俺はかかわりがないというような顔付きをしてるじゃないかね……。いつも俺だけは別だという……。しかしひとのことじゃないんだぜ。お前自身がそうなつて行くんだぜ。まんざらいやでもなさそうじゃないか。それとも将校はお嫌いかな。一兵卒であごをつき出す方がご趣味かな。二人は顔をならべて眼をすえて止り木の二羽の鳥のようにぶうっとけば立つて巳一を

見る。

いつのまにか、人々も彼等も三八銃を握っていた。銃口がほこりまみれにならないよう気遣ったり又そんな気遣いはいらぬやうな民主主義の世の中になつたんだからと思つたりした。

風はいつのまにか止んでいた。

あの高空でのたけり声もいつ止むともなく聞えなくなつていた。

ただ三八銃を持たされた人々の不安なざわめきを巳一は感じた。

どんな訓練が待ち構えているかは分らない。まだ何としてもそんなことはまさかならうと半信半疑であつた、外国人による訓練ということが、或いは事実なのかも知れないぞという氣持に傾いて来た。

然しどうなるのかは知ることが出来ない。未知の領域がいつも立ちはだかり、不安のざわめきが瀰漫している。

俺はもうこんなことは一度経験ずみの筈だ。或る程度までは肉体が堪えられる場合も分つて居る筈だ。苦痛を享樂に変えて行くずるさにも免疫のわけだ。巳一はそう思い、然し又そういう考えの種が身体の底に沈澱しているのを外からうかがわれぬやうに固く隠そうと思つた。

毛内も沢も不安に相違ないのだ。だが二人は抜け駈けて行くことに必ず熱中する。やがて一步先んじたら、二人は巳一に氣合をかけることを躊躇したりはしない。巳一はそのけじめをはつきり腹にすえて置かなければいけないと思つた。

エスカレーターで運ばれるやうに人々はそこに近付いて行つた。そことはどこであるかはつきりは

しない。ただ学生の時の軍事教練の時間のように、眼をつぶって銃を握り埋立地や松林の間に身体を伏せたり這い廻ったりしていると（埋立地の草むらに落ちていたあやしげなもの）二時間の単位時間が経過して解散が出来たのだし、そのまま下宿に帰って畳の上にひっくり返り眠りこけようとどうしようどと気儘であったように、今度のこともそうなるのだろうとぼんやり考えていた。そのうち解散の号令がかかって解放されるだろう。

その間も人々の散開匍匐している背景は徐々に移動していたわけだ。道が二股に分れて、その一つは坂を下って下の方に伸びているのが見えた。銃を持たされた人々は崖の上の方を進んで行った。空には飛行機が飛んでいるようであった。おさえつけるような爆音がしていた。太陽のかがやいた午後のおだやかな暑気があたりを満ちていて、博覧会の花火でも上げられているような、だれたのどかな錯覚の気分がただよっていた。崖下の道の方には、道路に沿って昔風のどっしり黒ずんだ木造の藁屋根の家が二、三軒かたまっていて、その家の前では年寄りや女子供が崖の上の道の異様な集団のおかしな行進を見ていた。それは声援を送っているようにも思えたり、又全然無関心に眼の前の見世物を見物しているのだとも見えた。然しそこにははっきりと、行進している人々とは別の、それに参加しなくてもいい状態があったわけなのに、巳一が列を離れてそこに逃がれて行くことを思いつかなかつたのは不思議という外はない。

彼は崖下の別の人々をみて、ちらっとおやあそこにああしても居られるんだなと思っただけで、その状態と自分の状態を結びつけてすぐさま自分の行動をきめる具体的なきっかけに考えをとどかせることは出来なかった。それはまるで思ってもみなかったことだ。そして殆んど同時に自分の行く先に

奔湍が近付いて来たことをはっきり本能的な知り方で気がつき、急に自分の所持品に気がかりが起つて来た。そこに行けばきっと検査がある。そして出て来た色々な品物について訊問されるにきまつてゐる。訊問は凡そ答えのしにくいものばかりなのだ。

「君は何だ」「……………」

「之は何だ」「……………のようなものです」

「なぜここに来たのだ」「……………」

「どうしてそこへ行くのだ」「……………」

「君は誰だ」「神呪^{カク}巳一です」「なに、カンノウミイチ？」

それは巳一にとっては恐怖だ。

と言つてもその場に立たされてしまえば何でもないことには思える。何でもないことではないかも知れず、何かがはつきりして来るようにも思えたが、然しそこに近付いて行く時の恐怖と厭悪と煩瑣におびやかされる気分は消されない。

巳一はポケットをさぐった。仕種が大きくなり、こっそりやつのけようと思つてゐるのにうまく行かない。彼はポケットからゴムサックを取り出し、同じポケットに有り合せた新聞紙片にくるんで片手の掌の中でもみまるめた。がさごそと大きな音がした。巳一は周囲に気がねをした。密告されるかも知らないという不安があった。巳一は毛内と沢の他の者の素性をまるつきり知らないのだ。毛内も沢もその品物を持つてゐる筈であった。いや毛内は早く処分しているかも知れない。然し少なくとも沢は持つてゐる筈であった。巳一はその処置を沢と相談すればよかつた。然し相談すれば周囲にこ

とがあらわになるので、それが巳一にはいやであった。と言って自分だけ勝手に処分すれば、沢はひとり取り残されるような結果になるかも知れない。自分ひとりだけで有利な状態を作って置くことが、沢に対しての裏切行為のように思えて少し拘った。こういうことはお互いが細心な注意で処分することにならされていなければいけないのだ。彼は沢が愚鈍に見えて来た。沢は毛内や巳一の真似ばかりして来たように思えた。ふだんは毛内の追隨者だが、毛内の暗示がない時には沢は巳一のやり方にも何の抵抗も感じないで従うに違いない。巳一はそのような意識にしばられて、少し指先がもつれたが、とにかく新聞紙片をまるめたものを崖下の方に何気ない素振りですててやった。それはうまく行った。恐らく誰にもそのことが異様なことのようににはうつらなかつたろう。彼が鼻をかんでその紙を捨てた位にしか思わなかつたろう（実は巳一の気持はもう一屈折したうしろめたさを感じていた。というのは、恐らくたとえ相手はそんなものを見つけても一顧も与えないだろう。その相手が一顧もしないようなことに先廻りして気を病み証拠を消すようなことをしているのが、鼠のようにこそこそして感じられ、それが彼をすつきりさせなかつた。だがどうしてもその証拠は湮滅して置かなければならないと思えることも動かさなかつたのだ）

まるめた紙を巳一は崖下に落ちるように投げてやったのに、うまく下に落ちて行かずにあやうい所に引っかかってしまった。

しまったと反射的に思いはしたが、すぐその後でその方がよかつたのだと思ひ返した。

そのままほうって置くことだ。むしろその方が作意なく見えていい。却って下に落ちていれば崖下の傍觀者たちがその品物をあやしむに違いない。巳一がそう思ったその時、今度は沢が彼と同じよう

な動作をし始めた。ポケットの中からゴムサックをとり出して紙きれにまるめこみ崖下に投げてやったのだ。そしてそれはうまく一度で下に落ちて行つた。

沢が又真似をしやがったと巳一は思った。と沢はそれだけでなしに崖はしにひっかかっている巳一の分まで落そうとし始めたのだ。沢は短かい棒切れをす早く見つけて、その先で紙をつついて下に落そうとかかった。然しなかなかうまく落ちて行かないのだ。巳一は舌打ちをした。何ておせっかいなことまでしやがるんだ。そんなことをすれば目立つんだ。目立ってはまずいのだ。彼は沢に憤りの眼を向けた。だが沢に何か話しかければその上に目立つことをなぞるようなもので、忿懣に身があつくはなつたが、じつと押えて沢の動作をいらいら見守つた。

ところが沢はその仕事にひどく熱心だ。全体の見通しとか均衡などは考えもせず、一種の善意と親切でとうとう目的を達してしまつた。しかし何と言つても周囲に気付かれぬようにしなければならぬことであつたので、沢の気持にもあせりがあり、そのためにくるみ込んだ中のものが包み紙からはみ出してしまい、別々になつて崖下に落ちて行つた。

「ちえつ、ぶざまなことだ」と巳一は思った。「こいつらと事を謀ることは出来やしない」

沢は汗ばんだほつとした顔を巳一に向けた。片えくぼが邪気無げに見えた。然し巳一はにこりともしないで沢の顔をじつと見返していた。(俺はほほえみ返すことが出来ないのだ。これは俺の……かも知れない)

幸いにこのことは摘発されずにすんだ。

然し巳一はそのサックを崖下の傍観者が拾つてわざわざ追いかけて持つて来るような気がしてなら

なかった。これ、おじちゃんのもじりか？ 子供がふうせんゴムのようになら下げて持って来るかもわからないではないか。ほれ見ろ、巳一は沢にそう言うだろうと予想して見るわけだが、又その言葉は自分の体内から発散し切れずに、うつろに反響しながら止まってしまふようであった。

巳一は一層孤立した自分を感じた。群衆の塊りというものが、厚みを以って彼をとらえなかった。晩夏の海水浴場でのうそ寒ささえ感じた。もっとももっと濃密なものでなければならぬのではないか。

相変らず行列は前方へ流れていた。そしていよいよ近付いて来たのだという気配が濃くなって来た。「駆け出して突っ込むんだ」

それは明らかな号令となって聞えて来たものではなかったが、何かそういうことでなければおさまりがつきかねるようであった。

すると人々の前に号令者が姿を現わした。

遂に現われたという感じであった。それは巨大なむくつけきものだ。人々がそれとなく観念して考えていた調練者としての外国人は言ってみればスマートな甘さを含み過ぎていた。そしてそこに現われた外国人というものは凡そ予想したものと違っていた。醜怪なるものであった。回教徒が想像する大入道の魔神に似ていたといえるかも知れなかった。ぶよぶよと身体はふくれ、顔なども凸凹していた。

その号令者は五、六人の女を連れていた。女たちの方は外国人ではない。それを人々の反対側に場所取らせて対峙させた。女たちは皆ちんちくりんな背丈で恰好悪く太っている。顔の色つやもすぐれず、固いが弾力のある感じだ。身体つきから受けるのは中性的なものである。額の生え際がせま苦し